

第34回 アメリカの教会

19世紀末ホーリネス運動と20世紀の教会

芦田 道夫

1. アメリカ史概観

アメリカのホーリネス運動を考える前に、ごく簡単にアメリカの歴史を概観しておきましょう。

- 1492年 コロンブスが西インド諸島に到着
- 1620年 メイフラワー号が、マサチューセッツ湾のニュー・プリマスに到着（102名の乗客と30名弱の船員、船は180トン）
乗客の内35名がイギリスの分離派ピューリタン
大陸のゴッド岬到着は11月19日、下船は12月26日
- 1629年 マサチューセッツ植民地建設
- 1636年 ハーバード大学創立
- 1639年 バプテスト派教会創立
- 1664年 イギリスがニュー・アムステルダムを占領しニューヨークとす
- 1681年 ウィリアム・ペンがペンシルヴァニア植民地建設
- 1718年 長老派牧師派遣（アイルランドよりテネント渡米）
- 1732年 オグルソープ、ジョージア植民地建設
- 1734年 ジョナサン・エドワーズ、第一次信仰復興運動起こす
- 1739年 ジョージ・ホイットフィールドが全植民地に信仰復興運動
- 1742年 フィラデルフィアにルター派教会創立
- 1760年 メリーランドにメソジスト派教会創立
- 1776年 独立宣言
- 1784年 メソジスト監督教会組織（アメリカのメソジストが正式分離）
- 1795年 ティモシー・ドワイト（イエール大学）の第二次信仰復興運動
- 1801年 第二次信仰復興運動のピーク
- 1807年 アメリカ、奴隷輸入禁止
- 1819年 メソジスト国内伝道協会設立
- 1844年 奴隷制廃止論争によりメソジスト監督教会南北分裂
- 1845年 奴隷制廃止論争によりバプテスト派南北分裂
- 1851年 YMCA設立
- 1857年 奴隷制廃止論争により長老派南北分裂
- 1860年 南北戦争～65年、63年奴隷解放宣言
- 1870年 ドワイト・ムーディ、シカゴで第三次信仰復興運動
- 1892年 ウォルター・ラウシェンブッシュ「神の国兄弟団」組織
- 1919年 世界ファンダメンタル・キリスト教協会設立
- 1929年 G・メーチェンらウェストミンスター神学校設立（保守派）
- 1939年 メソジスト系合同して「メソジスト教会」組織
- 1950年 「ビリー・グラハム福音主義協会」設立

2. ピューリタンの土台の上に

最初にニューイングランドに渡ったピルグリム・ファーザーズと言われる人たちは、国教会からの迫害を逃れた分離派ピューリタンでした。彼らはジェームズ一世の迫害を逃れてオランダに移住し、そこからアメリカに向かいます。

《ピルグリム・ファーザーズ》 1620年

1620年メイフラワー号（180t）で北アメリカに渡ったピューリタン（清教徒）とその他の人達で、エリザベス一世の宗教改革（英国教会）を不徹底とし、聖書に従ってさらに徹底した改革を進めようとしたイギリスのピューリタンの分離派の人達です。

彼らはオランダに亡命しました。ブラッドフォードらはヨーロッパを脱出して新大陸に新天地を求めて家族を連れての移住を決意、イギリスのサウザンプトンに寄ってイギリスからの参加者を募り、総勢102人（内ピューリタンは35人）で、1620年9月16日イギリスのサウザンプトンを出帆、大西洋の荒海に耐えて約2ヶ月後1620/11/11ニューイングランドのケープ・ゴッド岬に到着しました。

北アメリカのプロビンスタウンにて修理・補給をし、入植地探しに1ヶ月以上を費やして、出港後3ヶ月以上（96日）の航海の後の1620年12月21日アメリカ・マサチューセッツ州沿岸（後のプリマス）に上陸しました。上陸に先だち船上でメイフラワー契約を結びました。これが有名なメイフラワー盟約で、彼らは平凡な農民や職人達でしたが、ここに見られる社会契約思想は米国の独立や憲法制度に大きな影響を与えました。最初の冬の間は食料不足と病気で、半数以上が亡くなるという困難にみまわれましたが、不屈の努力と原住民の助けによって、ニューイングランド最初の植民地の基礎を築きました。

【メイフラワー盟約】

「神の御名において、アーメン。われらが主権者たる畏れ多き国王、神の恩寵によりイングランド、フランスおよびアイルランドの国王にして、信仰の擁護者、その他諸々の擁護者たるジェームズ国王。その忠臣たるわれら、ここに署名したわれらは、神の栄光のため、キリスト教の信仰の促進のため、ならびにわが国王と祖国の名誉のために、バージニア北部に最初の植民地を建設する航海に出かけたものであり、本証書によって、神とわれら自らの前で厳粛かつ相互に誓約し、われらのより良い秩序の保全、ならびに前述の目的を達成するために、結束し、市民による政体を形成する。そして、これに基づき、随時、植民地全体の福利のために最も適切と思われる、公正で平等な法律、命令、法令を発し、憲法を制定し、公職を組織する。そしてこれらに対し、われらは当然かつ全き服従と従順を約束する。

この証としてわれらは、われらが君主、ジェームズ国王のイングランド、フランスおよびアイルランド王としての治世18年目であり、スコットランド王としての統治第54年目にあたる西暦1620年11月11日にケープゴッドにおいて、本証書に署名する」

彼らはカルヴァン主義の会衆派的信仰を厳格に守ろうとした人たちで、この信仰的生き方を教会内だけでなく、社会に拡大して適用したのが上のメイフラワー盟約で、今日までアメリカの独立や民主制の基本となったものです。

厳格なカルヴァン主義ピューリタンの重要な特徴は、社会全体を彼らのキリスト教信仰によって形成しようとした点にあります。個々人の信仰と生活の浄化で

はなく、キリスト教的市民社会（「神の国」）を目指しているのです。

今日に於いてもアメリカという国を理解するためにはピルグリム・ファーザーの信仰がアメリカの理想として生きていることを知っておくことが必要でしょう。入植者たちは生活が安定してくると、まず牧師を育成するために神学校をつくりました。入植者達の半分以上が病氣や飢えで死んだと言われる、厳しい最初の冬を越してからわずか15年後にできたのが、今日もアメリカを代表する名門大学であるハーバード大学です。

3. 信仰復興運動の歴史（リヴァイヴァリズムの歴史）

アメリカのキリスト教の歴史を特徴づけるのは信仰復興運動（信仰覚醒運動）です。そしてその歴史が、今日のアメリカの教会を形作り、また私たちの信仰に直接的に関係しているのです。

《第一次信仰復興運動》・・・18世紀前半

1620年にアメリカにやってきたピューリタンに代表されるように、最初のころはヨーロッパで信仰上の迫害を受けた、主にイギリスの会衆派の人たちやイギリスからの圧迫を受けたアイルランド長老派の人たちでした。彼らは信仰に燃え、新天地で自分たちの理想とするキリスト教社会を建て上げようとしていました。

さらにペンシルヴァニア州に象徴されるように、ヨーロッパで宗教的迫害を受けたより多くの人たちが、信仰の自由を求めてアメリカに押し寄せてきました。彼らは勤勉で儉約、規律正しいコミュニティを各地で作り上げていきました。それは当然経済的豊かさも次第に生み出して行きます。

しかし一方、移民してきた人たちはそのような人ばかりではありません。次第に信仰的にはまったく自覚が無く、新天地で一旗揚げようという人たちが多くやってくるようになります。経済的豊かさと生活の安定、さらに信仰的ではない人たちの増加は、最初のころの霊的活力が失われていくことをも結果します。

1620年の最初の入植から約100年も経つと自己満足と、ピューリタンが社会の支配者層となったことからくる保守的な雰囲気の中で、信仰の形骸化が起こってきたのです。しかし心ある人たちは魂の飢え渴きを覚えていました。

1719年、ドイツから来たオランダ改革派のフリーリングハウゼン（1691-1747）の渡米をきっかけに、ニュージャージーからペンシルヴァニアへとリヴァイヴァルが広がり、オランダ改革派だけでなく長老派へと拡大しました。長老派のリヴァイヴァルの中心となったのはテネント父子で、彼らもフリーリングハウゼンと同じように伝統や教会の因習にとらわれないで、自由に町から町へと説教をして回り、その熱烈な説教によって多くの人たちが信仰的回心の経験を持ちました。

一方北部のニューイングランドでは時を同じくして（1734）、ノーサンプトンの会衆派牧師・神学者であったジョナサン・エドワーズ（1703-1758）が、人間の無価値さ、罪深さと神の怒りの裁きを説いて、信仰覚醒運動がはじまりました。エドワーズの神の怒りのメッセージによって恐怖心を起こされた人たちの中には自殺者さえ出たと言われています。さらに1739年、イギリスでの大衆伝道をジョン・ウェスレー（1703-1791）に委ねてアメリカにやってきたカルヴァン主義メソジストのジョージ・ホイットフィールド（1714-1770）が、諸植民地の町々・村々を馬で経巡り、信仰の覚醒運動に大きな寄与をしました。

この信仰復興運動は「大覚醒」あるいは「第一次信仰復興運動」と呼ばれ、アメリカの独立運動の下地を作ったとも言われます。信仰復興運動はピューリタンたちが目指したキリスト教信仰による国家（社会）体制ではなく、個人個人の悔い改めと信仰の決心こそが神の前に意味をもつとして、教派や教会を越えた運動となってアメリカを覆ったのです。その中心となったフリーリングハウゼンやエドワーズ、ホイットフィールドなどは皆、熱心なカルヴァン主義者で、信仰復興運動に反対した「古き光」と言われる人たちはアルミニウス主義者でした。

つまりこの後の信仰復興運動もそうですが、信仰の覚醒はカルヴァン主義であるかアルミニウス主義であるかではなく、別の要因、個々人が神の前に信仰の決断を迫られるという、信仰上の個人主義化が大きく影響していると思われれます。

植民地時代のアメリカでは、ある教派が圧倒的に優勢である地域では、その教派が「法定教会」として政治と密着していました。「法定教会」とは一種の国教會的教会で、税によって教会が支えられ、法定教会に属していることが公職につくことや様々な社会的権利に直結していたのです。たとえば会衆派はニューハンプシャーやマサチューセッツ、コネチカットなどで法定教会の地位をもっており、ニューヨークやニュージャージー、ヴァージニア、メリーランドなどでは、イギリス国教会が法定教会でした。まだ勢力の弱かったバプテストや長老派などは法定教会の制度に反対であったことは当然です。

しかし、第一次信仰復興運動ではこれらの制度や地域を越えて、「真の信仰者」は誰なのかという問いかけがなされたのです。巡回説教者たちは神の前に問題となるのは教義や教派、制度ではなく「真に救われているか」であると説教し続けたのです。そのため信仰復興運動は個人のあり方や決心、自発性などが決定的に重要であるという個人主義を信仰の面から強力に推し進める結果となり、やがてアメリカの独立革命（1776）や民主主義、政教分離を起こしていく土台となりました。もちろんこれには多くの反対者もあり、やがて信仰的熱情も鎮火していくのですが、第一次信仰復興運動によって培われた個人の自由や個人の決断への傾斜は、以後アメリカで繰り返し信仰復興運動が起こる前提となっていきます。そしてそれ以降の信仰復興運動は、この「真の」が何であるかをめぐって起こってくることとなります。

《アメリカの独立とメソジスト》

イギリスにおけるメソジストが組織された年代からわかるように、メソジスト派は第一次信仰復興運動に関与していません。アメリカに渡ったカルヴァン派メソジストのジョージ・ホイットフィールドが間接的に関係してはいるのですが、ウェスレーのアルミニウス主義と対立していました。しかし1760年にはアメリカに渡ったメソジストたちによってアメリカ・メソジスト派の最初の教会ができてきます。そして徐々にアメリカのメソジスト会は本国からの支援を受けながら成長していきます。

アメリカの独立（独立戦争 1775-1783、独立宣言は 1776）はアメリカの教会事情にも大きな影響を与えました。当然のことながらイギリス本国との強い関係をもつ教派ほど大きな影響を受けました。特に王制支持（トゥリ党）で、依然として国教会の司祭であり続けたウェスレーの指導下にあったメソジスト派は、アズベリー以外の教職にあった牧師がイギリスに帰国してしまい、そのままでは消滅しかねない危機に瀕したのです。ウェスレーは1784年、トーマス・ヨークを

監督としてアメリカに送り、同年フランシス・アズベリーがもう一人の監督として選ばれて、アメリカ・メソジストはイギリスのメソジスト派から独立して司教制をもった「メソジスト監督教会」として再出発するのです（イギリス本国のメソジスト派はまだイギリス国教会の中の信仰復興運動でした）。アメリカ・メソジスト監督教会では、独立戦争の時に独立に積極的でなかったウェスレーの影響力の低下は否めませんでした。やがてアズベリーを中心に、アメリカ的なメソジストの宣教が西部開拓と共に急拡大していきます。そしてウェスレーの教えよりも教理的に明確なジョン・フレッチャーやアダム・クラークの著作が中心的位置を占めるようになり、イギリスのメソジストとは違った道を歩み始めるようになりました。アメリカ・メソジスト監督教会は開拓が進む中西部への積極的な伝道活動を展開して急激な教勢拡大を実現していきます。

《第二次信仰復興運動》・・・19世紀前半

18世紀末期、アメリカの独立に続いてフランス革命（1789）が啓蒙思想の下で起こります。アメリカの独立革命を通して人々の関心が信仰から政治や社会体制に向かうと共に、つづいて起こったフランス革命は、アメリカの人々をその精神的根拠となった啓蒙思想の賛歌へと向かわせました。啓蒙思想は伝統や教会の権威ではなく、人間理性に最大の権威をおく思想のため、18世紀末期には多くの人々が教会から離れ、洗礼を受けて新しく教会員となる人がほとんどいなくなったと言われます。しかし、フランス革命がその後たどった急進派の恐怖政治などによって、アメリカの人々もフランス革命とその思想的根拠となった啓蒙思想への疑問をもつようになり、教会への回帰が見られるようになりました。

一方アメリカのメソジスト派は独立革命までは、イギリス国教会の一グループとしてイギリス本国のウェスレーの指導下にありましたが、前述のように独立後は本国との関係が絶たれたため、アメリカのメソジストは「メソジスト監督教会」として独立した組織となりました。

ウェスレーはトーマス・コークとフランシス・アズベリーに、司教ではなく長老職のためその資格がないにもかかわらず、必要に迫られ、按手してアメリカの監督（Bishop）に任命してアメリカのメソジストを託したのです。コークは間もなくイギリスに帰国しますが、アズベリーによってアメリカのメソジスト監督教会は19世紀前半にアメリカ有数の教派に発展します。

第二次信仰復興運動の中心人物として揚げられるのは、1795年にイエール大学学長に就任したティモシー・ドワイト（1752-1817）です。すでにニューイングランドのメソジスト派や会衆派に信仰復興運動が始まりかけてはいたのですが、ドワイトの感化によって多くの学生が牧師を志願して宣教に出て行くことになり、一気に広がりを見ます。

折からの西部開拓の波に乗って開拓地に進んだ人々は、広大な大地に開拓地が散在し、教会もなく、魂が飢え渴いていました。宣教の思いに燃えた牧師達は、ヨーロッパから持ち込まれた伝統的な教会のあり方や儀礼にとらわれず、自由に福音を伝えて巡回しました。説教を聞くために殺到した群衆で教会はあふれ、野外での大規模な集会が開かれました。遠く何日もかけて食料や夜具をたずさえて説教を聞きに来る人たちも多く、集会が数日間も野外で続けられることもありました。1801年8月、ケンタッキーでの記録によると、2万数千名の人たちが参加した集会が、一週間の間昼夜の別なく続けられ、長老派、バプテスト派、メ

ソジスト派の牧師達が教派を越えて指導したとあります。特にバプテスト派とメソジスト派は西部開拓民の状況に即した伝道を熱心に進め、この時期に後にアメリカの二大教派となる素地をつくりました。メソジスト派の監督アズベリーによると1811年に400回もの野外集会をもったという記録もあります。

このようにして第二次信仰復興運動は東部から始まりましたが、孤立し厳しい生活環境の中で霊的渴望を覚えていた西部開拓民に広がり、さらに西へ、南へと進みました。それはこれまでのヨーロッパの教会の移植としてのアメリカの教会ではなく、生活に追われ、教会も牧師もない開拓地で如何に福音を伝え、信仰生活を守っていくかという切実な課題から生まれたアメリカ的な（アメリカ生まれの）教会の姿が現れてきたのです。やがて一つの町にさまざまな教派の教会が混在し、それぞれ自分の意志で教会を選び、素朴で明るい賛美が多く歌われ、単純で福音的な短い説教、地域の共同体の中心となって社会的奉仕に積極的な教会が生まれていきました。

J.F.ホワイトは「プロテスタント教会の礼拝」の中で、諸教派の礼拝と並べて、「フロンティア派の礼拝」という項目を掲げています。「フロンティア派」という教派があるわけではありません。それは教会につながっていない西部開拓民への宣教の中で生まれたアメリカ的な礼拝（伝道的な礼拝）を指しています。

開拓民たちの多くは教育を受けておらず、文字も読めなかったために、祈祷書の伝統は失われ、賛美歌も簡単に覚えられるものでなければなりません。教会につながっていない多くの人たちがいたフロンティアでは、教会が伝道的になり礼拝も求道者を意識したものとなっていきました。それはやがてアメリカの教会全体の特徴をなすものとなり、教派の枠を越えてアメリカ的な教会の姿となっていきました。日本のプロテスタント教会は多くがアメリカからの宣教によっているため、基本的にこのフロンティア派の影響を受けています。

《野外集会＝キャンプ・ミーティングとホーリネス運動》

19世紀アメリカの信仰復興運動を特徴づけるものにキャンプ・ミーティングと呼ばれる野外集会があります。今日まで日本の福音派で続けられてきた、山間部や海岸の施設を使って数日間泊まり掛けで行われる聖会のルーツでもあります。前述の1801年ケンタッキー州ケーン・リッジでの一週間にわたる集会には各地から信仰を求めて集まった人々だけでなく、遊興やギャンブルを目当てに集まった人も多く、説教者はそれらの人々にも悔い改めの説教を語りました（つまり大伝道集会）。説教に対する反応は驚くほど大きく、泣き出したり、ころげる者、震え出す者など感情の開放や身体的反応を伴いました。

しかし企画した長老派では感情を開放するあり方に反対する者が多く、このような集会に参加した牧師を処罰する方針をとりました。一方この集会に参加したバプテスト派やメソジスト派では「キャンプ・ミーティング」が、リヴァイヴァル集会として取り入れられ、両派の急激な教勢拡大につながっていきました。他の教派が開拓地に神学教育の機関を持っていないために、教導者の不足を来したのに対して、バプテスト派やメソジスト派では召しを受けた信徒を説教者として用いて活用したことも両派が拡大した要因でした。こうして19世紀中頃にはバプテスト派とメソジスト派がアメリカを代表する二大教派になったのです。

メソジスト派は19世紀後半にはいると、いわゆる「ホーリネス運動＝リヴァイヴァル」の拠点としてのキャンプ・ミーティングへと進む人たちと、社会生活

の一環としての教会を維持しようとする人たちに分かれていくこととなります。

メソジストの信仰の中で「完全」を強く求める人たちは、「ナショナル・キャンプ・ミーティング・アソシエーション」(1867, John S. Inskip) を結成して、メソジスト教会の霊的覚醒を求めていきます。ナショナル・キャンプ・ミーティングでの中心的な教理となったのは瞬間的聖化と結びついた罪の「根絶説」でした。

やがて既成の教会から出てホーリネス運動の様々なグループを作るようになり、19世紀末には、完全に独立した教派としてメソジスト教会から分離していきました。その中で大きなグループとしては、P. Bresee のナザレン教会 (1895) や M. W. Knapp のピルグリム・ホーリネス教会 (1897) があります。

これらの運動の素地として、メソジスト監督教会の世俗化や体制化を揚げる事が出来ます。19世紀後半に入って、アメリカを代表する大教派となったメソジスト教会は勢力を誇示するような大会堂の建設や、中産階級・富裕層に特権意識をもたせる礼拝堂の貸席などの物質主義や理性優先の自由主義神学の影響など、その信仰が大きく変質してきていたのです。当然そのような人たちだけではなく、純粹に敬虔に生きようとする人たちも多くありました。アメリカのメソジスト監督教会は19世紀半ばに、まず奴隷制論争から南北に分裂します。そして上記のような問題から、北部のメソジスト教会から敬虔を求める人たちがフリー・メソジスト教会を結成して分離し (1860)、さらにナショナル・キャンプ・ミーティングの運動によって、よりラディカルにホーリネスを求める人たちが、たくさん的小グループとなって分離していきました。

《第三次信仰復興運動》・・・19世紀後半

19世紀後半の信仰復興運動を代表する人物は、ドワイト・L・ムーディ (1837-1899) です。ムーディはボストンで靴販売業をしていましたが、1855年に回心の経験をして会衆派となり、翌年シカゴに移って家業をしながら日曜学校を組織しましたが、1860年には福音伝道に専念するようになりました。1871年からは歌手のイラ・D・サンキーの協力を得て各地でリヴァイヴアル集会を開き、第三次信仰復興運動の原動力となりました。

ムーディの「神学」はアメリカ的信仰 (伝道) の特徴をよく表しており、その根底にある思想はプラグマティズムであると言われます。(ボッシュ「宣教のパラダイム転換 下」116頁参) ボッシュはムーディの特徴を以下の五点にまとめています。

- ①個人主義；罪人は一人神の前に立ち、聖霊は個人の心に働き、個人的体験こそ重要 (個人的決心)
- ②罪に打ち勝つことが出来るとの決心を強調・・・アルミニウス主義
- ③教理の正否は、それが罪人が回心に導くものであるかによる (プラグマティズム)
- ④個人の回心が社会的結果を生む (社会・政治への無関心)
- ⑤この世からの救いの強調 (酒酔、ダンス、離婚、煙草、日曜の新聞などから)
 - ・・・神の国を目指したピューリタンの生き方からの乖離
 - ・・・物質的豊かさや資本主義、愛国主義は受容

彼はイギリスへも伝道旅行し、イギリスの信仰復興を導き数千人の回心者を得、B・F・バックストーンもムーディの集会で献身しています。ムーディの信仰復興運動は、前述のナショナル・キャンプ・ミーティング・アソシエーションの働きと重なり、それぞれが影響を受けながら渾然一体となった信仰復興運動となり、

20世紀アメリカのファンダメンタリズム（根本主義）とペンテコステ運動の下地となりました。

またこの時期、イギリスに起こったケズィック運動（1875）はアメリカのキャンプ・ミーティング（メソジスト系ホーリネス運動）で主流となった「完全」を求める根絶説からは注意深く離れ、もっぱら聖霊（キリストの霊）の充たしを強調するようになりました。

やがて、メソジスト系のホーリネス運動とケズィック運動は罪の「根絶説」と「圧迫説」をめぐって激しい論争を繰り広げるようになりました。・・・今日ではもう忘れ去られています。・・・

4. アメリカ・ホーリネス運動の神学

19世紀末に起こったアメリカ・ホーリネス運動は日本のホーリネス教会の信仰的ルーツであり、今日のホーリネス信仰のアイデンティティを確立する上で鍵となるものですが、比較的最近までその神学的特徴が明らかにされることはありませんでした。しかし、1970年頃からアメリカにおいて、大きな勢力になったペンテコステ派のルーツやアメリカのプロテスタントの特徴をなすファンダメンタリズムの研究に関連して、徐々に捉えることができるようになってきました。

しかし日本においてはホーリネス信仰を神学的対象とすることが避けられてきたために（アメリカでも同じ状況だったのですが）、日本のプロテスタント史あるいは神学史の空白部分となってきました。

以下の部分は、日本のホーリネス信仰を考える上で直接的関連をもつ事柄として、日本のホーリネス信仰の把握に光を与えるものとなるでしょう。

《P. パーマーの『祭壇神学』》

19世紀アメリカのホーリネス運動を語るときに、かならず最初に揚げられるのが、メソジスト派の信徒であったP. パーマー（Phoebe Palmer 1807-1874）という婦人と彼女の『祭壇神学』（"Altar Theology"）です。しかし「祭壇神学」という名称は正式な神学用語ではなく、P. パーマーが主張し広めた全き聖化を得るための道筋を表す言葉にすぎません。

1836年姉サラ・ランクフォード（Sarah W. Lankford 1806-1896）がニューヨークの自宅で始めた火曜会（The Tuesday Meetings for the Promotion of Holiness）を引き継いで、「祭壇神学」と呼ばれる全き聖化の主張を多数の著書や集会を通して全米に広めました。この「神学」はナショナル・キャンプ・ミーティングにも大きな影響を与え、集会では専ら「祭壇神学」によって「罪の根絶」が説かれました。

P. パーマーは医師であった夫と共に35年ほどの間「火曜会」を続け、全米から全き聖化を求めて様々な教派から人々が集いました。さらに18冊の著書を通して"SHORTER WAY" "ALTAR THEOLOGY" と呼ばれる全き聖化への道を奨励し、アメリカ、カナダ、イギリスなどでナショナル・キャンプ・ミーティングやリヴァイヴァル集会で300回以上説教しました。

彼女はまた1839年にメソジスト監督教会のティモシー・メリット（Timothy Merritt）がキリスト者の完全の促進のためにボストンで発行した雑誌"Guide to Holiness"の編集を64年～74年にわたって務め、アメリカのメソジスト派でのホーリネス運動を方向付ける役割を果たしたのです。

P. パーマーたちはジョン・フレッチャーらにしたがって、ウェスレアンの全き聖化の教理を独自に発展させました ("Historical Dictionary of Methodism" P165)。

C. E. ジョーンズはその発展をこのように表現しています。

(Charles Edwin Jones, "Perfectionist Persuasion" P4)

「火曜会の人々はウェスレーが強調したプロセスとしての愛の完全を越えて、現在の可能性としての（今手にすることの出来る）全的聖化を強調したのです。ジョン・ウェスレーとフィービィ・パーマーはただ完全な愛のタイミングにおいて異なっているにすぎませんが、二つのアプローチは大きく異なった結果を生み出していきました。ウェスレーの、すなわちキリスト者の完全を後におく人々と、パーマー夫人の、すなわち原初的なメソジズムの復興を意図した人たちとになりました。ウェスレーにしたがう人たちは完全な愛を求めることを教え、パーマー夫人に従う人たちは聖化された生涯を教えたのです。」・・・（）内は訳者補足

また P. パーマーの教えの特徴をホワイトは次の六点にまとめています。

(Charles Edward White, "Phoebe Palmer and the Development of Pentecostal Pneumatology",

Wesleyan Theological Journal vo.23 1988)

- ①ジョン・フレッチャーの聖霊のバプテスマによる全き聖化に従った。
- ②アダム・クラークの「力を伴ったホーリネス」を発展させた。
- ③A. クラークに従い聖化の漸次性よりも瞬間性を強調した。
- ④A. クラークに従い全き聖化をキリスト者の目標ではなく出発点とした。
- ⑤「祭壇神学」を通して、全き聖化の達成を三段階のプロセスに単純化した。
- ⑥全き聖化の確証は聖書テキスト以外には必要ないとした。

P. パーマーはウェスレーに従って全き聖化を、罪をきよめる第二の神の恩寵と説きましたが、ウェスレーとは違ってそれは「汝、きよくあれ」と神が命じられている以上、それを今得ることが出来るはずであると考えました。そして全き聖化は人の応答（決心）によって与えられるとしたのです。

それを表しているのが「祭壇神学」と言われるものです。ウェスレーは確かに全き聖化をすぐに受けるように勧めました。しかしそれは神の時（神の業）を待つということにおいてでした。しかし P. パーマーはすべての人は以下の三段階に単純化、システム化されたプロセスに従うことによってそれを得ることが出来るとしたのです。（人間の側の信仰にかかっている）

第1ステップ ; キリストに自分の全てを委ねよ

第2ステップ ; 神は委ねた者を今、全く聖化すると信じ、疑うな

第3ステップ ; 全く聖化された経験を公に証しせよ

第3ステップは P. パーマーに特徴的で、全き聖化に留まり続けるために必要なことであると共に、ホーリネス運動の動力となりました。そしてこの3ステップにはありませんが、全き聖化を保障するのは聖句のみであるとの大前提がありました。「御言葉を握りさえしたら大丈夫」という信仰のあり方（御言葉信仰）の直接的起原を P. パーマーに見ることが出来るかも知れません。しかし、キリスト教信仰を「聖書」「伝統」「理性」「霊的経験」の四本の柱によって支えられるものとしたウェスレーの立場からは遠く離れることになったのです。

4. 終末論の変貌（千年王国説の変化）

19世紀アメリカの信仰復興運動と海外宣教に大きな影響を与えたのが「千年期説」の変貌です。すでに見てきたように、最初の移住者たちは新天地アメリカに自分たちの信仰に基づく、キリスト教信仰を社会原理とする社会を建設しようとしてきました。つまり地上の神の国です。ピューリタンたちとその子孫はアメリカというこの広く豊かな大地を託された自分たちこそ世界の中で選ばれた真のイスラエルであるとの自負をもつようになりました。1776年の独立宣言とその後の西部開拓、世界各地から押し寄せる移民は、ますますアメリカは神から特別に選ばれた国であるという意識を高めたとしても不思議ではありません。

こうして19世紀半ばまで、地理的拡大や産業の発達などを通してキリストの千年王国への期待が支配的でした。すなわち第一次信仰復興運動においても第二次信仰復興運動においても、社会の発展と拡大を楽観視する千年期説「千年期後再臨説」であったのです。（というより区別されなかった）

D. ボッシュによれば（「宣教のパラダイム転換下」P112）、19世紀の初期までは福音宣教にすべての信者が一致することが求められ、千年期説の明確な区別はされていなかったのです。しかし、1830年以降北米のプロテスタント諸教派の間に教勢拡大をともなう強烈な競争心が起きてくると共に、協調点よりも差別化の強調がされるようになり、「千年期後再臨説」と「千年期前再臨説」の論争の時代となっていきました。

《千年王国説》

黙示録20章1～6節に書かれている「キリストと共に千年の間統治した」という所謂千年王国の解釈をめぐって、古代からいくつかの異論が存在しました。千年王国説を唱えたドナティストに対して、アウグスティヌスはキリストの地上再臨を否定し、黙示録の千年王国を地上の教会の歴史を比喩的に述べたものと解釈しました。これは事実上「千年王国」の実在性を否定するので、「無千年王国論」と呼ばれます。アウグスティヌス（354-430）の説は以降カトリック教会の教義となり、キリスト教会の公的解釈となりました。

しかし公的には無千年王国説、つまりキリスト教会の世界支配の比喩的表現とされたとしても、迫害され、天変地異、疫病の蔓延、飢饉などに見舞われるときには、常に黙示的な（超自然的な）千年王国の到来への期待が噴出しました。

中世における最も有名な思想はイタリアのフィオーレの修道院長ヨアキム（1135-1202）が後半生に達した三期説です。これはその後の千年期説の根底に流れ続けた思想的根拠になりますので、少し詳しい解説をしておきます。

ヨアキムは、人類の歴史を、「三位一体」にあてはめ、以下の3つの「段階」に分けました。

・ 第一段階

三位一体の「父」の時代であり、旧約聖書の時代である。

これは「正義」の治世と呼ばれる。戒律の強調、それに立法者として、および人間への絶対的権威としての神の役割が強調される時代である。同時に、血なまぐさい旧約聖書の記述が語る通りの恐怖と隷属の時代でもある。文字通りの「神の下僕」の時代である。

・ 第二段階

「子」の時代である。新約聖書の時代であり、キリストから、自分達が生

きている時代がここに相当する。これは、「法」の治世と呼ばれ、神の恩恵の時代であり、福音によって指針がもたらされ、信仰と教養の時代である。神との仲介者として、教会が重要な役割を果たす時代である。ヨアキムは1260年にこの第二段階が終わり、第三段階の時代に移ると考えた。

・ 第三段階

「聖霊」の時代である。来るべき未来の世界で、「自由」の治世である。全ての人間に、神より直接、霊知がもたらされ、全人類の全てが修道士のような生活を送る。既成の権力、教会といった体制が消滅し、愛と歓喜と自由の世界になる。

《カルヴァンの終末論》

カルヴァンはヨアキムの三段階説を全人類の歴史ではなく、教会の歴史に置き換えたかのような終末論に立っていました。

第一段階は使徒の時期で全世界に福音が提供され、

第二段階の時期にはアンチキリストが影響力をもち、カルヴァン自身が生きた十字架の下にある教会の時代、

第三段階は教会の偉大な拡張の時代となるであろうというものでした。

(D. ボッシュ上掲書上 434)

すでに見てきたようにカルヴァンはジュネーブにおいて神の絶対主権による神政政治を実現しようとした人物です。カルヴァン主義のピューリタンたちもアメリカにおいて神政政治による社会建設を目指したのです。ボッシュも述べているように、カルヴァン主義は信仰と政治との強い結びつきをもっていますので、カルヴァン主義の宣教は植民地政策と密接に関連して進みました。ピューリタンたちはカルヴァンに従い、新天地を開拓している自分たちは、カルヴァンの第三段階の始まりに生きていると考えました。アメリカの発展は神の最終的勝利に向かっている証拠であり、自分たちから世界に向かって、いよいよ最終的な神の支配が展開するという楽天的で自信に満ちたものでした。

まだ明確な神学としてはなかったとしても、概ね19世紀初期までは神の国の実現に向かって進んでおり、宣教と社会改善を通して神の国の拡大に参加しているとの意識が支配的だったのです。

《新しい千年期前再臨説》

前述のように「千年期後再臨説」と「千年期前再臨説」の区別が意識されるようになったのは1840年代以降のことです。19世紀前半までの目覚ましい経済と科学技術の進歩や海外伝道の展開は、人々にもうすぐ千年王国が到来するのではないかという思いを起こさせるに充分でした。一方、この時期ヨーロッパでは聖書の歴史的・批評的研究が力を増し、ヘーゲル哲学の影響で歴史を弁証法的進展と考える見方が支配していました。合理主義的（人間理性の限界内）・自由主義的（教会教義の枠組からの自由）・進歩主義的（社会の発展）風潮から、キリスト教への批判や攻撃が続き、聖書を神の言と信じる福音的信仰が失われていきました。シュトラウス(1808-1874)やリッチェル(1822-1889)、ルナン(1823-1892)のように伝統的なイエス像を否定して理想の人間として描くようになりました。

アメリカではヨーロッパのこのような動きの影響を受けながら、別の形で現れてきました。アメリカの地理的拡大と物質的・経済的拡大は神の祝福の賜物であ

り、アメリカが神の道具として世界に用いられる証拠として、きわめて楽観的に受けとめられました。それはまた社会的・文化的発展と信仰の世界を密接な関連の中で見ようとするアメリカのキリスト教の特徴が現れてきた時期でもありました。このような傾向は今日のアメリカにも強く残されています。

信仰と文化とを同じ地平で見るとは、見方によっては信仰の世俗化でもありますが、それは意外にも、根本的には現世の豊かさや成功の内に神の選びの証拠（確かさ）を求めようとしたピューリタンの信仰の延長線上にあることでもあります。いずれにしても南北戦争前には社会の発展を千年王国に結びつけることに否定的であった千年期前再臨説は少数派であり、ホーリネス運動に大きな影響力を持ったチャールズ・フィニイ（カルヴァン派）やフィービー・パーマー（ウェスレアン）もまた千年期後再臨説あり、この世に対する楽観的終末論でした。

しかし南北戦争（1861-1865）を分水嶺として様相は一変します。19世紀前半まで一致協力して拡大繁栄してきた各教派（特にバプテスト派やメソジスト派）は南北に分裂し、敗者である南部には精神的、経済的、文化的な傷跡が残されることになりました。メソジスト派が再統一されたのは約100年後であり、バプテスト派は分裂したまま今日に至っています。

しかし勝者である北部を中心にして、アメリカは開拓地から真に近代産業国家（資本主義国家）へと変身を遂げるのです。急速な産業の工業化と大都市化、大陸横断鉄道による流通網の拡充、移民の増大による人口の急増など未曾有の繁栄と変化の時代を迎えました。それは同時にピューリタンの目指した（つまりアメリカの理想とした）質素堅実、厳格な倫理的抑制を求める信仰的市民社会が崩壊し、拝金主義、合理主義の激しい競争社会への変化を意味していました。

さらにダーウィンの進化論（1859）や唯物論的史観の浸透は都市部から次第に全教会の基盤を揺るがすものとなっていきました。このような19世紀における科学、哲学、歴史学、社会科学、心理学の市民への展開は、それまで市民レベルに於いては、尚基準的地位を保ってきた聖書の権威（判断基準）を実質的に失わせることとなっていったのです。19世紀末、これらの学問的（科学的）成果と信仰との関係を巡って、アメリカのキリスト教会は大きく二分されていきました。信仰と学問的成果を調和させようとする人たちは「近代主義者」、神学的「リベラル」と呼ばれ、それに反対し、それらから教会を守ろうとした人たちは「ファンダメンタル」「根本主義者＝原理主義者」と呼ばれました。

両者の対立は南北戦争で分裂し、カトリック国からの移民の急増でカトリックの存在感が増したたことと相まって、この時期からアメリカ社会に対するプロテスタントの影響力の衰退へとつながったのです。

千年期説に戻ると、ハロルド・レイサーによると（H.Ray Dunning Ed., "The Second Coming" pp.175）1867年に「完全の教理」を浸透させるために結成された "National Camp Meeting Association for the Promotion of Holiness" も、1880年代ころまでは概ね千年期後再臨説が支配的であったと言います。

しかし世紀末が近づくと、上記のような神学的立場を異にして大きく二つのグループに分かれて論争が激しくなり、ここに古代からあった千年期前再臨説ではない新しい千年期前再臨説が急速に広がってきたのです。それまでの千年期前再臨説は、世の終わりの事々に関する聖書の預言を教会の歴史と見て、ある預言は

すでに成就し、ある預言は現在成就しつつあり、またある預言はまだ将来に実現が残されている、というものでした。

ところがここで新しく出てきた千年期前再臨説（ディスペンセイションナリズム Dispensationalism）は、終わりの日に関する聖書の預言はまだ何も成就されておらず、そのすべての預言の成就是キリスト再臨の前の短い期間に速やかになされる、というものです。さらに古い千年期前再臨説ではキリストの空中再臨と聖徒の携挙は教会の大艱難又は反キリストと関係して起こると考えていましたが、ディスペンセイションナリズムでは教会の携挙は艱難の前に起こります。

ディスペンセイションナリズムでは人類の歴史を神の意志の特別な現れである七つの時代に区分します。七つ目の時代がキリストの空中再臨と聖徒の携挙、そして千年王国になります。今は歴史の完成とキリストの再臨にむかってカウントダウンされている教会時代の終わりにあると考えるのです。

このような新しい千年期前再臨説であるディスペンセイションナリズムはイギリスのプリマス・ブレズレンの創始者、ジョン・ネルソン・ダービー（1800-1882）の終末論に従ったものです。ダービーは今日の教会はすべて汚れているとして、そこから脱出（"Exodus"）して真のキリストにある兄弟の交わりに入るようにと主張しました。またその説ではキリストの十字架から再臨までの教会時代は挿入句にすぎない（大して重要でない）として、来るべき時代に重点を置きました。ダービーは1859年から1874年の間にアメリカやカナダを何回も巡回して、自説の普及に努め、ムーディやゴードンという当時の大伝道者達がダービーの説に従うようになりました。

南北戦争後の経済発展と移民の増加と進化論や合理主義がもたらしたアメリカ社会の変化に危惧をいただいていた多くの福音主義的な人々は、「リベラル」派の言う希望的将来を受け入れることは困難でした。むしろ内的に、あるいは外的に猛烈に押し寄せる反キリストの力を感じていたのです。それらの人々はムーディはじめ、ナショナル・キャンプ・ミーティングの説教者達が一斉にしたがったダービーの新しい千年期前再臨説を信じ受け入れていくことになりました。

アメリカのホーリネス運動における終末論の変化、すなわち千年期後再臨説から、この新しい千年期前再臨説＝ディスペンセイションナリズムへの転換の開始は1875年ころと考えられますが、爆発的な拡大は1890年代に生じました。

最初はカルヴァン主義の会衆派や長老派、バプテスト派に広がりましたが、メソジスト派ではあまりにも決定論的であり、ダニエル・スティールなどのメソジスト派の有名な神学者・伝道者はダービーのディスペンセイションナリズムはウェスレアンの信仰ではないとして退けて躊躇していたのです。

しかしメソジスト監督教会の信徒であったブラックストーン（W.E.Blackstone,1841-1935）がディスペンセイションナリズムにしたがって著した"Jesus is Coming"1878,（「イエスは来る」）は、広く読まれ40カ国語に訳されて一気に広がりました。東洋宣教会は昭和4年（1929年）に日本ホーリネス教会とかわした「協賛諸事項」の中で、日本ホーリネス教会がブラックストンの「イエスは来る」で示されている千年期前再臨説から離れた場合は、東洋宣教会から日本ホーリネス教会に譲渡されている財産をすべて返還するよう求めています。（米田勇「中田重治伝」405頁）

さらに National Holiness Association の伝道者であったジョージ・D・ワトソン

(1845-1924, George D. Watson) が "Steps to the throne and Holiness Manual", 1898 でディスペンセイションナリズムと関連づけて主張した重要な進展、すなわち艱難期の前に携挙されるのは、聖霊による全き聖化を受けた者＝聖霊のバプテスマを受けたキリスト者だけが含まれるとする説によってメソジスト系ホーリネス運動が主要テーマとしてきた聖霊のバプテスマによる完全の教理と一体となったのです。

さらにディスペンセイションナリズムはスコフィールド聖書(1909)を生み出してアメリカキリスト教界にファンダメンタリズムの重要教理となって根付いていく事になります。

日本においてはおそらくキリスト教的素地がなく、ディスペンセイションナリズムが完全な形で根付くことはありませんでしたが、聖書全体の構造的理解の基礎となっていることは間違いありません。

車田秋次著「御霊の法則」には付録として「旧新約聖書預言的図解」が付されており、その解説としてスコフィールドに依拠しながら、著者が独自にまとめたディスペンセイションナリズムによる時代区分が載せられています。

1. 無罪時代 (アダムの創造から堕落まで)
 2. 良心時代 (エデン追放からノアの洪水まで)
 3. 人政時代 (ノアの洪水後から諸民族の拡大まで)
 4. 約束時代 (アブラハムの召命からモーセの時まで)
 5. 律法時代 (シナイ山の律法付与からイエス・キリストの降臨まで)
 6. 恩恵時代 (イエスの降臨・聖霊の降臨から空中再臨まで)
- ここまではスコフィールドの説による
7. 患難時代 (空中再臨から地上再臨まで)
 8. 千年期時代 (地上再臨からダビデの位に座して地上を統治するまで)
 9. 新天新地 (大審判から宇宙におよぶ神意による完全な統治)

付録の図解は Clarence Larkin のチャートなどを参照されている。

("Clarence Larkin"のチャートの一部はインターネットでダウンロードできます)

5. 近代主義・社会福音とファンダメンタリズム

20世紀のアメリカにおけるキリスト教を語るときに、避けて通ることの出来ない二つの事柄があります。近代主義・社会福音とファンダメンタリズムの相克と、20世紀に入って世界的広がりを見せたペンテコステ運動 (Pentecostakism) です。ここで取り上げるファンダメンタリズムは今日でもアメリカのキリスト教を特徴づけるものであるだけでなく、アメリカという国を理解するために、キリスト教界を越えて重要なポイントとなっています。

(1) 近代主義

キリスト教近代主義という、他と区別できる明瞭な領域はありません。さまざまな思想的、社会的要素からなる、ある傾向と言ってよいでしょう。曾根暁彦氏は「アメリカ教会史」の中で S. マッシューズが掲げている「近代主義の信仰」の性格を引用していますので、さらにそれを要約して参考にします。

- ① 思想と信仰の自由を求める
- ② 宗教的思索に科学的研究の結果を受け入れる
- ③ 聖書の研究に歴史的・文学的研究の方法を受け入れる
- ④ キリスト教信仰が人間の必要に応じるものであることを信じる

⑤キリスト教信仰は他の知的・道徳的必要と矛盾しないと信じる

⑥神の救いの啓示としてのイエス・キリストを受け入れる

このような背景には、ダーウィニズム（進化論）やプラグマティズム、聖書の研究に文学的手法を取り入れたドイツの高等批評などの影響があり、個人の信仰や各個教会の独立性を尊重するバプテスト派がその主流を形成していったとされます。（「アメリカ教会史」260）

（2）社会福音

19世紀末から20世紀初頭における「社会福音」と言われる運動の代表としてあげられるのが、ウォルター・ラウシェンブッシュ（Walter Rauschenbusch 1861-1918）です。ラウシェンブッシュの社会福音の基本的概念は千年期後再臨説による「神の国運動」にあります。1889年に「正義のために」という月刊誌を出し、1891年には「神の国兄弟団」をバプテスト派牧師の協力を得て組織したことに現れています。社会を良くすることが千年王国（神の国）の到来につながる、という基本姿勢があるのです。したがってラウシェンブッシュが目指したのは「キリスト教社会主義」ではなく「社会的キリスト教」であることに注意しなければなりません。「神の国兄弟団の精神と目的」には次のように記されています。（曾根暁彦「アメリカ教会史」230）

- ①会員はその個人的生活を通してイエスの倫理への服従を証しする
- ②イエスの思想を私的会話、講演印刷物などを通して宣べ伝える
- ③キリスト教の社会的目標に尽力する。富に関する教えを実行する
- ④一般の人と連携し、社会改善の働きにキリスト教精神を吹き込む

ラウシェンブッシュは教会が社会の問題に注意を向け、キリスト教信仰によって社会の改善に積極的に関わることを求めたのです。労働運動にも当然目を向けましたが、彼にとっては待遇改善よりも労働者の魂を信仰に導くことが目的でした。やがてこの運動はバプテスト派だけでなく30の教派を巻き込む「アメリカ・キリスト教会連合協議会」となり、アメリカの教会がもつ一つの性格を形成することになります。しかしこの運動の根拠は、人間的努力や社会改善が神の国につながるということであり、人間中心的な近代主義との一体化が指摘されます。

（3）ファンダメンタリズム

20世紀前半のアメリカキリスト教界を特徴づける傾向が「ファンダメンタリズム＝根本主義、原理主義」と呼ばれる保守的キリスト教の擡頭です。もちろんこの「ファンダメンタリズム」という呼び方には、狭量、頑迷、非科学的、分派主義などと言った侮蔑的な意味合いが込められることが多いため、この傾向にある人たちは「保守的福音派（主義）」と呼ばれることを好みます。

ファンダメンタリズムは南北戦争後に急成長してきた「千年期前再臨説」や「ホーリネス運動」、「ディスペンセイションナリズム」の延長線上に生まれてきたものですが、伝統的なキリスト教世界観を脅かすと思われた「進化論」「聖書の歴史的・批評的研究」「社会福音」等への反撃として、結束した勢力を形成してきたものです。従ってファンダメンタリズムはホーリネス運動に教理的骨格を与えた千年期前再臨説やディスペンセイションナリズムを内に含みつつ、ホーリネス運動よりももっと広く教派を越えた信仰的立場を表しています。

ファンダメンタリズムは最も基本的な性格として、19世紀末のホーリネス運

動から「自分たちこそ真のキリスト者」であり、近代主義や社会福音に汚された教会は名ばかりの偽キリスト者にすぎないという自己意識を受け継いでいます。特にファンダメンタリズムの戦いの最前線は聖書を巡る闘いでした。

一般にファンダメンタリズムの聖書を巡る特徴は以下の三点にまとめられます。

- 1) 聖書の無誤性（＝いかなる誤りもない）を堅く信じる。
- 2) 聖書の歴史的・批評的研究の成果への強い反感をもっている。
- 3) 聖書の無誤性を信ぜず、聖書の歴史的・批評的研究を受け入れる者は、
それをもって真のキリスト者ではないと断定する。

聖書の無誤性の根拠となっているのが、2テモテ3：16に基づく聖書の靈感（神が真の著者）ですが、このことは19世紀中頃まではほとんど問題になることはありませんでした。多くの信仰告白や信条がそれを告白しており、キリスト教信仰に於いて、聖書が靈感された神の言葉であることは自明のことと思われ、厳密に考えられることはなかったのです。しかし教会の権威や教理からの自由を求めて（「リベラル」と呼ばれる）聖書を特別な書物として例外にせず他の古典と同じように研究され始めると、様々な問題が浮かび上がってきました。

例えば旧約ではグラーフやウェルハウゼンが、モーセが書いたひとまとまりの文書と考えられていた、いわゆるモーセ五書を長年の編集過程を経て、かなり後代になって出来上がったものであり、J（ヤーウェ文書）、E（エロヒム文書）、D（申命記文書）、P（祭司文書）が混在しているとの仮説を発表（1883）しました。さらに聖書そのもの成り立ちについての研究（高等批評）が聖書全巻にわたって行われるようになりました。このような学問的な研究とともに、伝統的な教会の教義に従わない自由主義神学や、神の世界創造に対する進化論、魂の救いに集中しない社会福音などの動きが相乗効果となって、伝統的な信仰を守りたいと思っていた人たちには、福音的信仰への脅威と考えられるようになりました。

こうしてそれまでは曖昧な意味合いしか持たなかった聖書の無誤性ということが、聖書の批評的研究や進化論に対する防護壁として大々的に論争されるようになったのです。ファンダメンタリズムはそれ以前の聖書信仰とは違い、明確に聖書の無誤性を主張し、それ以外の立場をとる人たちを真のキリスト者として受け入れないという戦闘的な性格を有しています。特に保守的な南部バプテストは、ファンダメンタリズムの強い教派として知られていますが、ファンダメンタリズムは教派という組織の問題ではないので、様々な教派を越え、国教を越えて存在する勢力となっています。現在ではアメリカのファンダメンタリズムはナショナリズムと融合していると言われ、政治的一大勢力として注目されています。

しかしアメリカのキリスト教自体、ある程度最初からファンダメンタリズム的な傾向を歴史的にもっており、20世紀のファンダメンタリズムほど極端でないまでも、似た体質を持つ福音派を含め、アメリカのキリスト教を表している一つの傾向であると思われる。

しかしファンダメンタリズムの問題点は、聖書無謬論やディスペンセイションナリズム的傾向ではなく、ピューリタンや敬虔主義、そして直接的には19世紀末のホーリネス運動から引き継いでいる「真のキリスト者」という概念にあると思われる。ホーリネス運動では「真のキリスト者」はジョージ・D・ワトソンによって結合された聖霊のバプテスマと携挙との結合によって主張されましたが、ファンダメンタリズムではどれだけ精細且つ強固に聖書の無誤性を信じているかによって計られました。そしてそれが自己の信仰の高まりにおいてというよりも、

「リベラル」な勢力に対する拒否反応として出てきたことによって、それまでの聖書信仰とは異なる性格をもつことになったのではないかと思われるのです。

ファンダメンタリズムには聖書の無誤性と並んで逐語靈感説が揚げられることがあります。現実には聖書の無誤性にしがたい、教義を守るために逐語的解釈よりも寓喩的解釈をする場合が往々にしてあり、必ずしも逐語的に聖書をそのまま受け取るわけではありません。厳密な釈義をするよりも柔軟な解釈をすることにより無誤性と学問的成果や科学の進展との調和を図っていると見ることが出来ます。今日でもファンダメンタリズムがつよい地域ではダーウィニズムを学校で教えるかどうかをめぐる論争や裁判が起きていることはよく知られています。

6. ペンテコスタリズム (Pentecostalism)

(1) その歴史 ("Wikipedia"から引用)

近代ペンテコステ運動は 1901 年にカンザス州トピカのベテル聖書学院で行われた年末年始の祈祷会で、指導者であるチャールズ・F・バーハムをはじめ神学生のほとんどが「聖霊のバプテスマ」を体験し、異言で神をほめたたえたことが契機となったと言われます。1906年、その学生でもあった牧師のウィリアム・シーモアがロサンゼルスのアズサ通りで集会を行ったところ、集会中に聴衆である信徒のなかに「聖霊のバプテスマ」を受け、エクスタシー状態に陥り、異言を語る現象が起きました。このことがロサンゼルス新聞に掲載されて、全米に広まったのです。このリバイバル集会は、3年にわたってロサンゼルスのアズサ通りにある伝道館、メソジスト教会などの教会堂を借りながら続けられ、その間にアメリカ各地のみならず隣国のカナダや海を越えたイギリスなどからも集会へ集う参加者がでました。さらにそのような参加者が証しすることによって世界中に広められたのです。そこから1914年にアッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団が生まれたのを皮切りに、フォースクエア福音教会、合同ペンテコステ教会などの各教団が発足し運動が組織化され始めました。

(2) その特徴

ドナルド・デイトン (Donald W. Dayton) はその著 "Theological Roots of Pentecostalism" 1987 において、20世紀初頭に起こったペンテコステ運動の神学的源流を詳細に検討して、19世紀後半のメソジスト系のホーリネス運動にあることを結論づけました。その中でデイトンは、P. パーマーやかつてはチャールズ・フィニー (カルヴァン主義リヴァイヴァリスト) の協力者で後にメソジスト系のリヴァイヴァリストとなったアサ・メーハン (Asa Mahan)、ナショナル・キャンプ・ミーティングの説教者において「罪の赦しのホーリネス」から「聖霊の力のホーリネス」へとすでに変化しはじめていたことを示しました。

トピカやアズサストリートでの新しいペンテコスタリズムの展開は、やがてメソジスト派からカルヴァン派へとその担い手が変わっていきました。それとともにメソジストの流れの特徴であった第二の恵みとして与えられる聖霊のバプテスマによる「聖化」は失われて、聖霊のバプテスマのしるしとしての「異言」や「力」が強調されるようになったのです。

敬虔主義的傾向の特徴の一つは初代教会 (使徒行伝時代) への強い憧憬であり、ウェスレーも初代教会に理想の教会を見ていました。19世紀ホーリネス運動もその流れを引き継いでいるとみることが出来ますが、しかし使徒行伝の時代にだ

け焦点を合わせるといふものではありませんでした。キリスト者の信仰経験としては、それよりも出エジプトの紅海徒渉とヨルダン川徒渉を新生と聖化の経験として強調することが中心でした。

(3) 20世紀の発展

しかし20世紀のペンテコスタリズムにおいて、聖書の中心は使徒行伝2章のヨエルの預言へと完全に転換したのです。ペンテコスタリズムの信仰的中心は、「後(春)の雨」(ヨエル2:23)、「すべての人にわが霊を注ぐ」(ヨエル3:1)と約束された時代が、使徒行伝2章の日のように始まったという一種の、ディスペンセーションリズムにあると思われまふ。それは必然的に使徒時代のように、その証拠として、「異言」と目に見える「力のしるし」としての「いやし」に傾斜して行くこととなります。つまり19世紀ホーリネス運動が、祭壇神学に象徴されるように第二の恵みとしての全き聖化を「証し」として表現していったのに対して、ペンテコスタリズムではその表現として、「異言」や「いやし」という現実的な証拠のかたちをとっていきました。

アメリカではペンテコスタリズムは言葉の不自由な移住者や低所得者層にまず爆発的に浸透し、20世紀に生まれたペンテコスタリズム系の教派は数量的にもっとも成長した教派となりました。

「ペンテコステ運動」は「ヒーリング(いやし)運動」、「後の雨運動」(1940年代)、カトリックや聖公会へと広がった「カリスマ運動」(1960年～)へと拡大しました。これらを基盤として1980年代にはフラー神学校のピーター・ワグナーらが提唱した「聖霊の第三の波」(「力の伝道」)が現れました。

第三の波＝「ペンテコステ運動」を第一の波、「カリスマ運動」を第二の波として、異言やいやしの強調は共有しながらも、聖霊のバプテスマを新生時に与えられるとし、悪霊からの開放(「霊の闘い」＝「力の伝道」)を強調する。

カトリックのカリスマ運動＝

カトリックカリスマ刷新は、プロテスタントのペンテコステ派とカリスマ運動の影響を受けてはいるが、教義的にはプロテスタントのカリスマ運動の概念とは異なる。カリスマ運動のように「聖霊のバプテスマ」を新しい体験として考えるのではなく、秘跡(サクラメント)において受けたバプテスマの「実際化」であり、恵みの「確認」であるとする。

後の雨運動＝「Latter Rain Movement」とは、旧約聖書ヨエル書の2章の実現を信じる運動で、始めの雨を初代教会のペンテコステとし、現代を後の雨とする。プレイズやダンス、手を置く祈りなど後に起こるカリスマ運動につながった。

【課題】 私たちのホーリネス信仰がアメリカ・ホーリネス運動から継承していると思われる事々を揚げてみましょう。

次回	日本のホーリネス信仰 (実質的に最終回になります)
2月10日	